

Historian's View

NO.13

部は、クラブにとって身近な「国際」
クラブはひとつではよろしくない
部長は州知事
クラブに風穴を開けるのが部長

2010年9月18日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

それぞれの前身

ワイズメンズクラブの前身は、1920年代初め、米国・トレド YMCA に生まれたトリムカクラブ (Tolymca Club) です。一方、日本最初のワイズメンズクラブである、大阪クラブの前身は、1926 (大正 15) 年に、大阪 YMCA の中に設立された大阪 Y クラブです。

日本の YMCA は、明治以来、民主的な市民社会の形成を目指して、大衆を啓蒙する大演説会を行ってきました。そこには進歩的、革新的な思想、言論がありました。ですから、東京 YMCA のあった神田美土代町を管轄する神田警察署と、東京帝大がある本郷・本富士警察署の署長は、知性派だったといわれています。

1921年、日本の YMCA に北米 YMCA から、それまでの赤三角形に表される Spirit・Mind・Body (霊性・知性・身体) に、Social (社交) を加えた「4方向(側面)」が、人格形成(全人)に欠かせない要素であるとの考えが紹介されました。(現在の YMCA はさらに幅広く捉えているようです)

そのような背景から、1925 (大正 14) 年に完成した大阪 YMCA 新会館 (土佐堀青年会館) は、会員やグループの活動に適した部屋を整え、体育館、ビリヤードまで備えたものでした。

趣味、教養、体育などのプログラムを展開する中で、奈良傳主事は、若いビジネスマンによる社交クラブ、「大阪 Y クラブ」と「タイガークラブ」を立ち上げました。(タイガークラブはすぐに挫折してしまいました)

この大阪 Y クラブは、卓話者を招いた月例会をもち、親睦もあり、奉仕も行っていました。現在のワイズメンズクラブのあり様と大きな差

はありません。

すでにその頃には、ロータリークラブも大阪に設立されており、米国においてはワイズメンズクラブが国際組織として歩み始めていました。奈良傳主事は、それらの情報も得ていたことでしょう。

1928 (昭和 3) 年、奈良傳主事は、YMCA 視察のために渡米し、ワイズメンズクラブ国際協会の書記長、ヘンリー・グライムズ (Henry D.Grimes) を自宅兼事務所に訪ねました。互いに意気投合して、彼は数日間、グライムズ宅に滞在し、ワイズメンズクラブの仕組みと、将来を話合いました。

クラブはひとつではよろしくない

翌年、帰国した奈良さんは、あっさり「大阪 Y クラブ」をやめて、ワイズメンズクラブに切り替えました。なぜだったのでしょうか。

私の想像ですが、奈良さんは、自分のやってきたことは間違いなかったという確信とともに、大阪 Y クラブのもうひとつ伸び悩みの現実を感じていたのだと思います。ワイズメンズクラブには、大阪 Y クラブにないものがある、それが「仲間クラブの存在」、「国際性」だったのではないのでしょうか。

つまり、この種のクラブは「ひとつであることはよろしくない、仲間クラブがあってこそ」と思ったのではないのでしょうか。

部長は、州知事

現在のワイズメンズクラブの組織で、クラブにとって最も身近な「国際」は、「部 (District)」です。部は、ワイズメンズクラブ組織の本質に

かかわるといえます。ですから、ワイズメンズクラブは部の長を敬意をもって「District Governor」と呼んでいます。

Governor は、さまざまに訳されますが、米国においては州の「知事」、英国においては、植民地の「提督」とされています。ワイズメンズクラブは米国で生まれ、育ったわけですから、州知事というのが最も実態を表現しているように思います。中央の指令によって動くだけでなく、独立した組織の長として、裁量権が与えられているのです。

幕藩時代にたとえば、区理事に指名される事業主任が旗本だとすれば、部長は一国一城の「大名」ともいえます。しかし、部長には、お家取り潰しもお国替えもありません。これは大きな違いです。州知事の方が適当でしょう。

部長は中間管理職ではない

ワイズメンズクラブの「部長」は、中間管理職ではありません。部も、区の出先機関ではありません。

区から依頼されて、部長がクラブメンバー数の異動報告（半年報）を求めたりもしますが、これは区に言われなくても、部長自身が調査し、把握しなくてはならない事柄です。

部長は中間管理職だという誤解が、部長にもあるように見えます。

毎月「理事通信」が理事からクラブ会長に発信されています。その数日後に、同じものが区のメンバーに対して、ドットコムで流されます。さらには、クラブ会長に発信する数日前に部長を含む区役員にも送られているのです。これは、何年か前に、部長である自分が知る前にクラブ会長が知るのをおかしいという、強い意見が部長から出て、余裕をもった時間差をもうけているのです。「理事通信」は、かつては「RD memo」といい、理事からクラブ会長に直接流す通信でした。今は性格が変わりましたが、決まっている内容を流しているのですから、だれもが同時に知っても、部長の権威を損ねることでもなく、

むしろ、それで良いのです。

クラブに「風穴」を開けるのが部長

部長は州知事とは違い、任期が1年ですから、腰を据えて何かをやるということではできません。これは、いくらおだてられてもそうです。前任の部長から何を受け取り、次期部長に何を引き継ぐかです。

部長のクラブの対する仕事の中で最も大きなものは、クラブに「風穴」を開けてあげることではないでしょうか。

孤立したクラブがあります、クラブ会長も孤立しがちです、20人程度のクラブではメンバーの多様なニーズに対応できません、活動が硬直します、時には停滞も避けられません。

このような状況の中で、閉じこもりがちなクラブに出番を与えてあげてほしい、ワイズの魅力を語ってほしい、他クラブの素晴らしいメンバーやユニークな活動を面白く紹介してほしい、部や区の表舞台に引っ張り出してほしい、BF代表に応募することを本人に直接勧めてほしい、人と人を出会わせてほしい、それらの先にあるワイズメンズクラブの広がり、素晴らしさを示してほしい、と思います。

部の組織も、会費も、事業も、クラブの連帯と交流のためにこそあるのです。

あとがき

東京・フロストバレーYMCA パートナーシップの名誉主事の本間立夫さんが現役時代の話です。場所はニューヨークのYMCA。

本間さんが子どもたちに、YMCAの三角形、つまり Spirit、Mind、Body について話したことがありました。傍らで聞いていたYMCAのエライさんが言ったそうです。「ミスター・ホンマ、いい話を聞かせてもらった。今度、どこかで使わせてもらうよ」。

ヘッドハンティングで迎えられる人はこんなことも知らないことがあるようです。と同時にYMCAも常に変化しているのです。